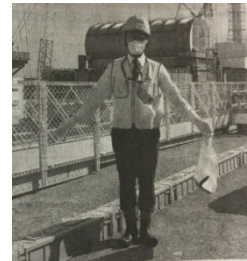


## 福島第1原発、軽装備でもOKも…見通せぬ廃炉

標題は日本経済新聞 10月28日「HOT STORY」。レポートにも書いたように、今年6月に宮本憲一先生ご夫妻と仲間らと福島第1原発を視察したので、この記事に注目した。私のレポートでは触れてないことも書かれているので、抜粋して紹介したい。

東日本大震災から7年半。東京電力福島第1原子力発電所では廃炉に向けた作業が続く。敷地内は軽装備で移動できる場所も増えてきたとはいえ、まだまだ先行きは見通せない。記者が現地取材した。

持ち込み可能なのは筆記用具やレコーダーのみで、スマートフォン（スマホ）やパソコンの持ち込みは禁止だ。カメラも取材団全体で1台に制限された。運転免許証で本人確認を済ませ、金属探知機や静脈チェックを通過し、ようやく構内に入ることができた。



現場作業員とすれ違いながら奥へ進むと、この日の「装備品」が配られた。紙でできた簡易のベストや、スマホぐらいの大きさの警報付き線量計「APD」など。一見、心もとないが、「1～3号機を見渡す高台はこれで十分」と説明があった。長靴や軍手、ヘルメットやマスクも装着。靴下は2重ばきになったが、それでも軽装備だ。

再度、車に乗って構内を移動する。道中、建物には矢印とともに、「Tsunami」の表記があった。震災当時、原発を襲った津波の高さを示すもので、うっすら痕も残っていた。津波の高さは15mあったとされる。

はじめに立ち寄ったのは4号機だ。震災時に運転停止していたこともあり、炉心溶融（メルトダウン）した1～3号機に比べると廃炉に向けた作業が進んでいる。それでも軽装備で立ち寄れるようになったのは、今年5月の連休明けからという。

1～3号機には近づけず、次に車で移動した先は海拔35mの高台だ。100m弱先に、震災で大きな被害にあった1～3号機が俯瞰できた。水素爆発で建屋が吹き飛んだ1号機は鉄骨がむきだしで、がれきが残っていた。3号機はかまぼこ状の屋根カバーが設置され、燃料取り出しに向けた準備段階に入っているという。

「ピー！」一。説明を受けながら見ている途中、胸ポケットに入っていた線量計が鳴った。数値が20マイクロシーベルト増えるごとに鳴る仕様という。取材時に配られた注意事項には、取材時の被曝上限は100マイクロシーベルトとしてある。



帰り際に汚染水の貯蔵タンク群に立ち寄った。構内に900基、106万トンある。タン

クが満杯になる日も近いが、汚染水を処理するめどは立っていない。

管理施設に戻って線量計を確認すると、積算の被曝量は 30 マイクロシーベルトだった。再度ゲートを通り、隣接する新事務本館に移ると、この日取材団を代表して撮影した自分のカメラに、東電社員によるチェックが入った。

撮影した約 190 枚撮影のうち、約 50 枚が削除された。理由はテロリスト対策だ。「保護シャッターやフェンス、監視カメラが映り込んでいるのは NG」という。撮影時にも「ここが NG です」と説明があり気をつけて撮ったが、わずかでも入り込むと NG という厳しいチェックだった。

一通り見て回って感じたのは、爪痕がなお残っていることだ。きょうの装備で構内の大半を歩けるようになったとはいえ、1~3 号機の核燃料取り出し作業などは思ったような進捗ではない。廃炉の完了までの道筋は見通せないというのが正直な感想だ。

(2018 年 11 月 2 日)